

映画「海すずめ」 監督：大森研一
出演：武田梨奈 小林豊 内藤剛志
岡田奈々 吉行和子
2016年初夏公開 http://umisuzume.com

特集 ②

映画「海すずめ」で宇和島の魅力を世界へ発信、今こそRESTARTの時



公益財団法人宇和島伊達文化
保存会 理事長
／宇和島伊達家13代当主
伊達 宗信 (宇和島市)

「海すずめ」と宇和島伊達400年祭

全国劇場公開映画「海すずめ」は、今年初夏公開予定で、完成へ向けていよいよ大詰めの時期にある。本企画は2013年頃に大森研一氏(砥部町出身)との出会いから始まった。全国公開され記憶にも新しい映画「瀬戸内海賊物語」や「ポプラの秋」の監督だ。私は、2015年「宇和島伊達400年祭」をきっかけに地域の良さを見直し盛り上げていきたいとの想いを強く持っていた。地元からの期待も高まり、大森監督と共に有志による製作実行委員会を立ち上げ、宇和島を舞台



製作記者発表会(東京)

は昨年秋約3週間かけて行われた。幼稚園からおじいちゃんおばあちゃんまで、あらゆる世代の300人のエキストラが参加した。地元の飲食店が協力し合い日替わりで炊き

にした映画企画を進めるに至った。「海すずめ」は、小説家になる夢をもち市立図書館自転車課で働く、主人公のすずめ(武田梨奈さん)が、自転車に乗って街じゅうに本を届ける、あたたかな人々の中で練り広げられる青春物語。今でも城下の暮らし文化が息づく自然あふれるまち、宇和島を全面的舞台にロケが行われ、史実とフィクションを交え描かれた、爽やかな現代ムービーである。

世代を超えて地域ぐるみ市民参加型で映画を盛り上げる

「海すずめ」は、「宇和島伊達400年祭」開催期間中に製作が始まった。撮影

出しがふるまわれた。撮影が滞りなく順調に運ぶようにあらゆる場面で、多くの地元ボランティアによる協力もいただいた。テレビで見ると遠い世界のヒロイン、ヒーローたちが、地元宇和島の街を歩き、食を楽しみ、撮影に臨んだ。地元でホットな話題になることはもちろん、市外県外から多くのファンたちも駆け付けた。

本映画製作は、「宇和島伊達400年祭」の数々のイベントの中でも、行政と民間が垣根や世代を超えて一体となった、メモリアルで大きな目玉企画のひとつになったに違いない。

笑顔の現場で「宇和島を好きになってくれた」キャストやスタッフたち

大森監督が大切にしてくれ、地元で受け入れる側として私たち実行委員会も大事にしたことは、「アットホームな雰囲気、笑顔の現場」。宇和島、南予地方の良さは、温厚な人間性や地域性にあることを、大森監督は十分に理解してくれていた。宇和島の人たちも笑顔でもてなし



ボランティアによる炊き出し

岡田奈々さんとエキストラの皆さん



た。そこには飾らない普段のままのあたたかな雰囲気があった。多くの俳優陣やスタッフたちが、宇和島を好きになり、心に残るロケとなったと、たいへん喜ばれた。

主題歌は、「トイレの神様」で有名な植村花菜さんが書き下ろした新曲「ただいま。」である。まさに、あたたかく受け入れる故郷を想う心境と重なる。映画と共に主題歌もとても楽しみである。

足元にある地元の魅力に 気づく機会に

映画では、宇和島の街並みや自然風景、食文化、祭りなどの地域行事も盛り込まれている。宇和島城や天赦園などの観光名所をはじめ、私たちが普段から生活している商店街、住まいなども撮影現場となった。地元人にとっては、いつもそこにある当たり前の風景が多く登場する。

また宇和島の九島も映画の中で舞台となり登場する。九島に暮らすおばあちゃん役は、名女優の吉行和子さんだ。九島は、今年4月に九島架橋が開通し、船ではなく車で行き来できるようになる。これまでとは違った生活や人の交流が始まり、観光化や経済効果も期待されている。時代とともに変わっていくものと、変

わらないもの、変えてはいけないものがあると思う。いわゆるハコやモノは、その時代に応じた技術的進歩と利便性・効率性を追求し、造られ、壊されていく。一方で、豊かな自然、美しい風景、良き暮らし文化は残していくべきものであると思う。製作現場でも大切にしたい「温厚な人間性」も私たちの宝のひとつだ。

本映画は、地元にとつての当たり前が、実は魅力であるということに気づかされる機会にもなった。魅力を大切に、新しい価値を加えながら発信していくことが、これからの子供たちの未来へとつなぐ第一歩となるのではないだろうか。

今を生きる私たちが、 未来の子供たちへつないでいく

「海すずめ」は初夏の全国劇場公開のほか、国際映画祭等への出品も予定し、これからプロモーションを大々的に展開していく。一方、地元では「えひめいやし」の南予博2016が開催される。映画のロケ地ツアーな



主演 武田梨奈さん 宇和島城にて

ども旅行会社とともに企画を進め、映画を通じた観光活性化も期待されている。映画の公開とともに地域の物産、文化など、国内だけでなく世界へと発信できる、またとない大きなチャンスを控えているのだ。



内藤剛志さんと武田梨奈さん
遊子水荷浦の段畑にて

宇和島伊達400年祭は、映画製作をはじめ、行政と民間の距離が近づき、垣根を越えて宇和島を活気づけることができた。この経験や機運を発展的に活かしていくことが、今後大きな力につながっていくと信じている。宇和島も過疎化・少子高齢化が進んでいる現状を受け入れながらも、どこを目指しどうあるべきか、何をしていくべきか、しっかりと望む現実と向き合い、未来を見据えていかななくてはならない。

400年という節目を経験できるのは、今、ここに生きている私たちだけだ。ここに生かされている使命を自覚して、地域の魅力を発展的に未来へとつなげていく契機にしていきたい。

写真提供：©2016「海すずめ」製作委員会